



志保之利 五篇 二

價 5
508
58



15
508
卷 58



毛厚之りも皮し二

○又異邦より五色の唐紙が流す何の玉より制しむすや
答昔益列の紙は凡流の紙にせしむ宋の章望之り
延漏録に益列の十楹膏牋其事載て無色あり
又より華夷通高者又れ今所より制衣むす
見より其大際如丸

南京 安慶府 湖廣 江西 浙江 備列 福建 建寧

中外紙多し和國紅夷の紙も亦我皇の朝群紙
日本紙も異なりしも多て大なり

○近世阿蘭陀より派々升降圖四ホウ地球圖九百二十年カニ

加留多圖舟ヲホリ羅徑磁石自鳴鐘 星尺 星眼鏡メカシ

イスタゴ日影ヲ計ル器等古人の事所の思ひて今世天文家の

学多を以て考へ知る事多し故に今世に多し

阿蘭陀七列寛永十八年以來

セイラント グルウ子ゲ ライタラキ クルトラント

ツラフンイセレ フリイスト トラニタ

○最明寺ノ入道の歌小



幾度か思ひ定てかりりんたのむすまはかゝる

太田持資入道ノ灌汝哥を感

いきてせふ人自ととふありいてとあてをてんうとれし夢

嗚呼倭寇ハ素盞鳥尊ハ雲ノ神祇と始とリ是則嗚と梭とワリくす
此彼の帝の御製ハ舜の履戴王にの代ハ春頃ハまされちや代ハの春曲
ハ国凡の休也也と云ふ抄ハ政ハ興ハ鑑誠ハ足とるハ實多ハある
後世是と以て好まの味とありハそと熱教の音とこれハ配りて
精沛と貴子時頼持資等の所悲傷の音河のこられ全く時勢のみ
ありたり妙音院の相國ハ柏子の秋寂と見聞ハ其音ハ高其音ハ
愁多と云ふいハこして多しをハいりあり

○用明天皇元年丙 穴穂部皇子説殺ス三輪君

穴穂曾行其叔母炊屋姫推古三輪君切諫故殺之



二年未打定穗与馬子諫欲殺守屋大連而馬子弑定穗
定穗有自立之志馬子黨既尸欲立權立故殺之蓋欲自恣也

既尸馬子殺守屋大連

世俗相傳以守屋為逆臣是浮屠胡族之說而正史未有可稱逆也

崇峻天皇五年壬辰既尸馬子謀弑天皇立女主

既尸者賊子馬子者乱臣然叔氏崇峻之稱佛法與隆之祖嗚呼
佛法乱賊之術彼既尸使馬子謀弑逆也乃為不知者立女主自
專其政其嗣却為馬子之子族滅也流說論因果地故告人親王於
日本記直筆辨其乱惡故世名聖德之謚何謂乎甚哉乱臣賊子

○ 中院通茂冰室尺歌

を此世の春小とを人りしは月かけてさぬ水

○ 活生末此二百首仍喜の元も澄和一凡わし打し用文

ありとくは日とくは城島田作り夜明に拙い防りや

りて本宿の小山お登り誓回の御神を短老漢賜りし

ふ八重瀧陽介ぬきりに守り候ふ実小をよむいふ死に

りて是を打たれ人か案ありとそく思もあつたれ神の石

の冥急りしより初の一樹の遺愛のあふ氏を今もあふ

りていへたまの神の鄙俗をた非すとのりて守り



言と秘に説して人の求と妬せたりとてりれと書り
物とわたりてはる人の又貪りて道ありとやあきの瓦の
盗人の衣を奪れに竹女其うり落せと拾いて厄あり
りれ厄ありとせと被盗人一夜獲つてはつたもこつ物と
しつあつてつめ又とこつとすて我か人やくと帰つ
あつとよとそれと名なき又にと又は片をこつと人
つたつとあつたつ 須磨寺の梅と人の子むつた
とれ一程と切つ一程ときまると名かけし勝と書し梅り

むりあつ人 凡そ花は半春のあつたれあつと一程の
装束をこつと名なきは竹女と名つけしつ
そつたに恨みありとつたつ 寺下のゆかりあり寺門
か細流も傍り幽林と回りしお弁人軍に宿草草也宿
河村の長明寺も入てやとつたつ 寺に系連某地也
物とつてつたつとつたつ 寺に系連某地也
井甕の跡たるか先没無後餘一世異朝市とつて
猶寺のむりとつたつ 長湫の役の際兵發も泥も鳥有とつた

某所此像の儘中にありしと里人草堂と嘗て
是と云へけり道に右京進士世永重と名を著り卿家
力とありや西の一室と建てて祀り香火の場ととわたりや
あはれなる長母寺の文流として洛の東福禪寺の流下とあり
是とありはれゆゆありて可れを公同より祝うて

寂く空門春將尽 山花僅着雨三枝

人間百歳知奈事 愁喜夢残黍一炊

韶光小去而勝川小臨一葦と浮て松洞の緑と詠真

雲の空を度に嘯く松河の里山野道凡せとあり
地とや又の大貳あついんたてと此所に住めりといふ
あふりぬ一葉散れちりて水故法く拈紫凡ふてあり
香にやありし禪刹少ゆりあふりて食いてあり
虎のふりたる思はし紅と写く錦糸あすことと
筈と止て固く息の芽元録とあり青繩にたすあり
数ふねりたりとありいりよらまをさしあり
声をきりてあり路よりゆるり小幡文の山とあり

ゆれ曲阜むりしを残りて麦浪凡そく流る天久の
夏天正の礼人ばれ馬行せしあく名織田豊臣の業
意なき多ししと云ふぬをのを流るとありにきいと
向
仍をのすくを感して

休言世態隆寔連 可我山川無改時
遅日安行人安坐 曲肱獨笑水雲澗

春日井郡山田庄小幡村城墟 村より乾方
百間斗

東西百拾余間南北六十間斗二重堀大永中園田與十郎
築初其後織田家の者となりしと云ふ

同郡森山村城墟 村より西ノ方
九十五斗

東西三十余間南北二十八九間堀一重津田孫十郎
居城多し一源十斗八備後守
信秀の所なり

凡本列古城記一冊ありこれに委々れ考して
曰し比義行主家臣としてものる國志編修の時某の
書如何書しと人々問を多しし其時の草稿多しと
取出し書て多し多しありて其に多し年月と向
りれよ竟く事

水々たのみのそ系のみつてんしよのそまかつてん

○ 苑の歌みりの中に

すけふら子の枝のさしてれこけまふむのたま
志の効は中よ

大母子丸紙のよせりしはふすかたのこりん
つりよみりをも川よえり月かたなふりゆいでんとい
うはりあゝあゝむのあまのこゝ又あやふもさるる

○ 後村上院

建徳二年三月辛亥北朝應安三年三月三日崩一説正年二十四年
三月十一日崩之記録異説如左

○ 或人問津嶋牛頭天王社社家正位と稱國府官藏
本元龜二年の本國帳よと六海部郡正位津嶋牛頭天
王と録せり神階何とみ代も進めりや答社家猶此事を
不知或記小後村上院建徳元年庚戌勅奉正位

北朝後光嚴院
應安三年三月

又問其神階奉進ノ取造宮の儀何りしや答後龜一
院弘和元年辛酉北朝後田融院
ノ永徳元年也 三河守定省大橋氏
年一七造進せしむと云

又問津嶋祭は何處の取始か答は此の里を治む事
ありことなき人々してかりきめし事と爲りしと云
そ後日家セ多子丸也、京師の祇園會をうけて
永享八年丙辰六月十四日御靈會此處かり治せり
以来今まかく莊觀とあり傳とあり

又問日所記書殿、堀田孫良其姓祖武内宿禰と
記し社聞て時代如何答南朝の正平元年丙戌
北朝光厳院
貞和二年也七月十三日記類堀田氏の家書見たり

又問津嶋神主の姓古より氷室氏の姓は何を答は昔
事不詳應永中一永享
七年井伊谷宮比治孫良王津嶋よ
のふれを少い大橋定有、
以野城三度良王の令子良并或尹良王
三男トミ漸始て神職を供せし物也と云ふ事ありて卒後必
小田井大學助定常橋一族故りて神主とありて後中
治郡氷室村を領せしもの少くは稱号を氷室とす
其子孫傳へ嗣しを石尾氏より継又石見氏
も氷室家とあり今も此傳を親忠の孫堀田

凡そ系某子神をいふなり

天野も藤原天野ニアラス本平岩氏ナリ堀田家へ養子ニ行キ又
水室トナリ然レハ今ノ水室ハ古削ノ姓ナリ

又河津嶋侍平野氏清原氏と聞ゆ平井此姓ナリ
横井氏の族なりと云ふ所ありい人答物之清原業忠ハ
南方ニ仕へしゆれの方其流ハ赤目村城主横井越前守
平政持の子宗長嗣けりもと平井之水心と稱せし
業忠ハ政持此婿ありと云ふなり

横井ハ相模守高時ニ男相模次郎時行ノ長子赤橋四郎父生害ノ時都
ニノ尾刈愛知郡横井村ニ住シ横井越前守高時ト稱ス其子越前守
政持ト云ハ是説今横井家ノ家傳ト異ナリケレハ一書ノ説如此ナレハ

捨カクテ記シ置侍ル記録ニクハシキ人幸ニ正シクマハ所謂高持ハ
横井系圖ノ時任カ然レハ時行ノ流ナリ

石人の需小係り古家此日記を抄して書之者也

○或曰近世所見川キハ洪水あり福堤切水溢して動
りすも田處ニ害あり是時運兵予曰是太平の日山林
亦亦と伐事多し故に河上ノ山荒土流れ物也人ニ信す
又川下多ク地を懇して田とあり母屋に泥水決すり事
少なり歳をまて土溜川填まり少りの水と首より
高く流るる所堤防是より為し潰破れ事多し也

老人云しと云しありしを愛は自然の勢なりありし
申ありしは國家を治れ人の一時に利ありしを
万代の害と為しつゝありし

○蓬生麻中不扶乃直荀子

その中此麻ありしを扶ふらざるのまの蓬なりて
年暮時の秋あり嗚呼賢者麻のまにぬきたといふに
邪曲ありしを正化して正直に成りて賢哲徳を小
人知とゆへ不善の俗とありし人君も人を正して

其のまを奉進のまをせしめて國家を奉りし人

○空海益像ノ讚詞性灵集等にも及ぶ後人の附記
くしや各是は高野山の直然一附属の頌なりと末の句
又り書せしめ、密家の信なり

○因小云佛土の各目に釈迦不動大日不動とあり
西目より北より南に釈迦教令輪身半目小化不動の各の
教輪身の中秘抄問答にあり是を佛土の各目小くし
○又麻多羅神の法は法と不信ありしを廣沢流の

真言書小其法あれ、傳來久しきものと云ふ

○大神朝臣^{ツカガ}ノ姓ハ素佐能雄^{ツクナノ}第六世大國主之後 姓氏録

旧事本記日本書紀小云と云く曰く一統^{ツクナ}を衣^イ小^コ係^ケて大和國御諸
少^コ日^ヒ尋^ミ子^コ宮^{ミヤ}の遺^ノリ三^ミ紫^{ムラサキ}あり一^{ヒト}三^ミ紫^{ムラサキ}と云ふと云くやあ^アは^ハ年
あ^アの^ノ河^{カハ}小^コ豊^{トヨ}後^{ノチ}回^{マヒ}祖^{ソノ}母^{ハハ}嶽^ノの明^{アカ}神^{カミ}と云ふ事三^ミ篇^{マキ}と曰く大^{オホ}友^{トモ}與^{ヨリ}産^{ウマ}記^キも
河^{カハ}況^シ之^レ載^シて猶^モ毒^{クサ}く被^レ嶽^ノ豊^{トヨ}後^{ノチ}回^{マヒ}入^イ田^{イデ}卿^ノ也桓^{ヒコ}武^{タケ}の御^{ミコ}時^{トキ}堀^{ウラ}川^{カハ}
大^{オホ}納^{ノク}言^{コト}某^ノ緒^ノ方^ノ庄^ノ日^ヒ野^ノ小^コ田^{イデ}名^ナ宇^ウ田^{イデ}村^ノに配^{タテマツ}流^リあり一^{ヒト}そ^ノ女^メに祖^{ソノ}母^{ハハ}嶽^ノ
の神^{カミ}通^トひ弘^{ヒロ}仁^ニ二年^ニ辛^シ卯^ボ三月^ノ廿^ニ一^{ヒト}男子^ヲと生^{ウマ}す是^レ大神^{オホカミ}朝^{アサ}臣^ノ大^{オホ}太^タ
唯^タ基^キ也と云く又^モ今^{イマ}佐^サ伯^{ハク}氏^ノ其^ノ子^コ孫^ノありて勢^セ列^レ安^{ヤス}濃^ノ津^ツに住^スせり被^レ
家^{イヘ}鋒^{ホウ}叙^{キョ}多^クし中^{ナカ}也^{ナリ}巴^ヤ作^シりつた太^{オホ}刀^{タガ}ハ祖^{ソノ}母^{ハハ}嶽^ノより相^{アヒ}傳^ツて是^レ
大^{オホ}に秘^ヒす藤^{フジ}堂^{ドウ}高^{タカ}次^ジ寛^{カン}永^{エイ}三年^ニ十^{ジュウ}月^ノ十^{ジュウ}日^ニ被^レ太^{オホ}刀^{タガ}と云く是^レ時^{トキ}
疾^{ハヤ}板^{イタ}安^{ヤス}の^ノ名^ナ也^{ナリ}と云く之^レを如何^ニも云^フるもや傳^ツり人^ト
祖^{ソノ}母^{ハハ}嶽^ノ小^コ所^ノ祭^ノハ豊^{トヨ}と云く唯^タ命^ノと云くや女^メ神^{カミ}の母^{ハハ}に通^トひいふ
しと云くは況^シふ

○信列川中嶋西度合戦記ハ日本通鑑編撰ノ

合^カ命^ノニ依^ヨり上^ノ松^ノ家^ノヨリ献^テ上^ノノ實^ノ録^ノ也弘^{ヒロ}文

院^ノノ学^ノ士^ノ春^ノ酒^ノ井^ノ修^ノ理^ノ大^ノ夫^ノへ謁^シテ曰^ク曰^ク川^ノ中

嶋^ノノ役^ノ上^ノ杉^ノ家^ノノ家^ノ傳^ノト甲^ノ陽^ノ軍^ノ鑿^ノニ所^ノ記^ノト

年^ノ月^ノ不^レ同^{ナリ}合^ノ我^ノノ事^ノ跡^ノモ亦^モ大^ニ異^{ナリ}十^ノリ通^ノ鑑

ノ書^ノ何^ヲ以^テテ書^ススヘキト酒^ノ井^ノ乃^ハ老^シ中^ニニ此

事^ノヲ談^スス土^ノ屋^ノ氏^ノ臣^ノ本^ノ甲^ノ列^ノ家^ノ也^{ナリ}等^ノ曰^ク曰^ク上^ノ杉^ノ家^ノノ記^ノ禄

ヲ以^テテ記^ス之^レ則^シ甲^ノ陽^ノ軍^ノ鑑^ノノ説^ノ謬^ノト成^テテ兵^ノ家

者流ノ所傳虚トナルヘシ軍鑑偽書トナラ
ス又上杉家説モ不廢ヤウニ書セハ可也ト
故軍鑑ト上杉家記ト並ヘ記セシト云々上杉
家ノ本ハ寛文九年五月八日抄畧シテ献上
ノ一冊予ニ得之

川中嶋合戦

永録四年九月十日武田典厩山本勘介等討
死之

右甲陽軍鑑之説也

川中嶋前合戦

天文二十三年八月十八日謙信與信玄太刀
打及武田左馬助信繁討死

天文廿三年八月十九日政虎守佐義駿河守定行所賜ノ證文ニ
モ信玄ト太刀打事有リ又同月廿八日大田義濃守ニ賜扶信
繁ヲ討ニ事分明也

川中嶋後合戦

弘治二年三月二十五日夜一條六郎板垣駿

河守小笠原若狹守諸角豊後山本勘介等討
死之 永祿四年前六年也

弘治二年三月廿七日謙信長尾但馬守横瀬上野分由良新助
連名ヲ賜證狀同四月十六日宇佐美駿河守ハ賜狀等ニ詳也

右西度川中嶋合戦記上杉家實録說也

此證文京極家或記列之関氏及宇佐美定祐カ家
藏ニ今在之

○謙信太刀打の時信玄軍配團ニテ侍スト云說非
也信玄モ亦太刀打也南光坊天海及畠山入
庵眼前ニ是ヲ見タリト云今甲列流ノ軍法

者流實録ヲ不見謾ニ說ヲ為ノミ可耻ノ甚

ニキニ非スヤ

○長尾景虎上杉憲政ニ号ヲ得テ上杉政虎ト

号セシ永祿三年輝虎ト改ム於此管領職ニ

補シアミロ烟代ノ興ヲ免サレ公方ノ故蒲相允ヲ附

ル事ヲ許ス又朝ニ奏シテ侍從從四位下

彈正大弼ヲ拜セシト云

○南方記傳四卷自元弘元年辛未至長祿二年

戊戌 此記世に希ナリ吉見氏ノ家藏アリ

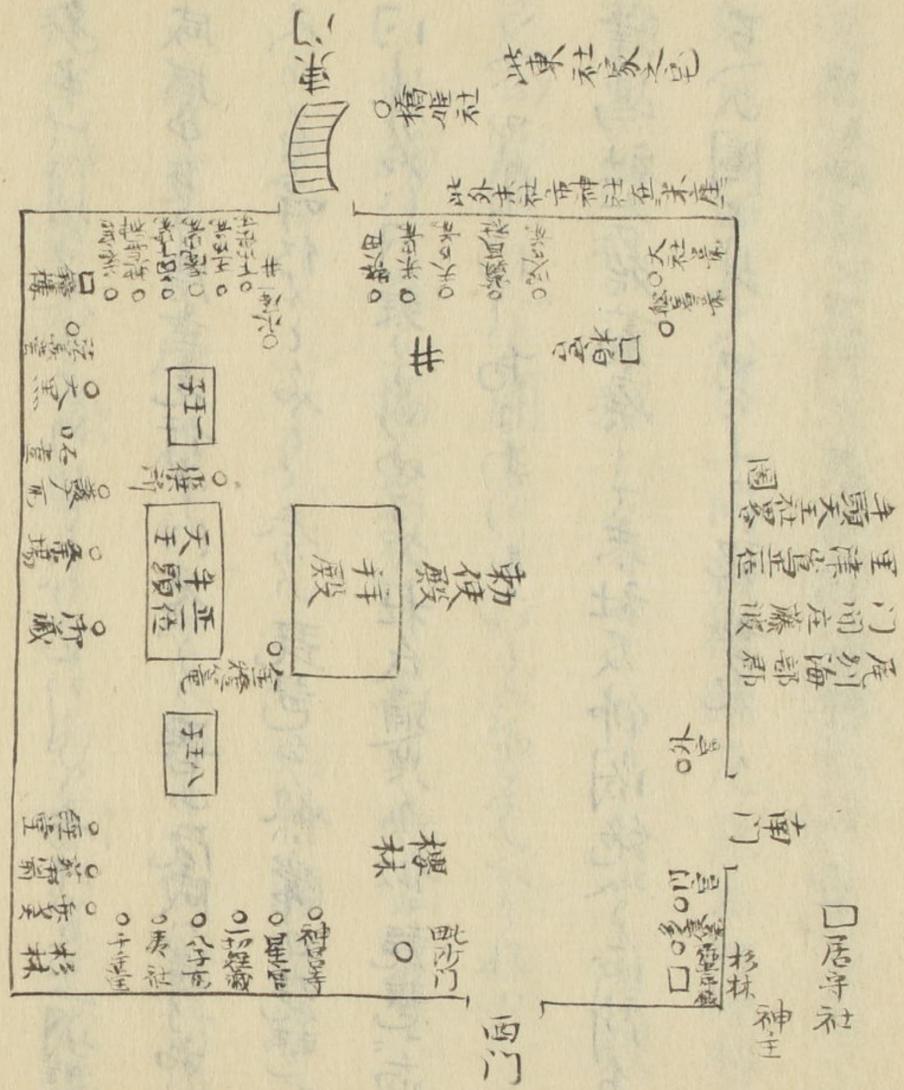
○卯月の初正六位上内藏権頭尾張宿祢仲頼の家
契田の御社の神祕と尋きつゆり中は渡殿の御
戸立の傳多くと聞よりてつく事免くられ
教海、三根の橋多つ子と云つてやまを空とたふん
仲頼宿祢

○琵琶の異名と月琴とふりあ書に有芝夜儀

多半は月琴とよめられり分てこり月琴阮
咸れゆり唐書元行中に及り晋の阮咸造り神あり
人の名を呼ばるとなり奏め琵琶をれは常の琵琶と
同一名に月琴といふや杜氏通典亦似琵琶而圓と
之ハつらけいあま

○津嶋社今殆荒廢して末社及佛閣絶へる所あり
古の圖と見て畧して記す如左
末社佛閣の在所其方角の大槩を記す而已

普光院義教赤松滿祐之女為毒一旦問殺毒
 曰我政可否所評干世如何一妾曰政淳而民
 安問赤松之女則曰苛政如踏白刃公大怒世
 人以我改為白刃乃汝踏之以刀而令踏之女
 不肯履踏刃死矣滿祐恨之謀逆公疑之使
 同朋某遣播列伺察之同朋與赤松圍碁同朋負
 碁籌輸贏以其子擊滿祐之類滿祐無怨色而
 為戲同朋歸洛謂公曰滿祐反者朋矣忍耻惜



命之有大謀故也公夫備享喜吉元年滿祐朝
矣六月二十四日公饗滿祐視隙將刺之其族
向惣右衛門某以男寵被幸知公之謀私告滿祐
滿祐還圖弑及猿樂半令其族某弑之惣右衛
門引告公之謀後速自盡大友興廢記

按此說与家譜等說異今據此說謂之弑
政之可否問侍女者一用詞以侮坊二將弑
滿祐滿其謀於其族三是公大誤而右者在

侍女謂政之非殺之餘不定言嗚呼

○近衛前殿下こと一姫の春閑東以下向の殿後河
の園より多岐より多岐

ゆきそのし神代つと日み此國の光のゆのたを

はりりう代の言の意をの意をれ之各言記留ま
活生の初と都又せむい卯月よりつゆありきれ意大
小山の初理を及後を及後後と初理持の光格後右系
格と及後右系格と追ふ人と八位つりつりまのり
守とつりりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
たまひ

○毛利元就初其主大内義隆氏の仇備前氏を
誅せしむ。但し多く良氏を撰のり。初隆は乃
後を立して自ら十六國のあしとありし。一志
のす所より。次女貞麿氏に嫁せし。而高木可之
○濃州可児郡綿藏村の川原に初場とてありし。
名あり。傳へて信濃國信人初場大市某。初氏の不
ありと。按ると。應永中を以て。室の女子尹良王
位列し。之のあしなり。たり。初場大市並合の

小山の林蔵は。海と遮りて。初い言あり。多く自害せし。初れ
中。昭元下。又。初場大市と。其人なり。や。綿藏の合。初
年月と。傳へし。其の初。初いあり。と。つ。あり。事
。初。あり。と。田合の。其。物。初。は。一。同。く。初。初。事。多。し。
○。倭。初。亦。あり。し。本。合。の。初。初。今。の。初。あり。と。湯。毎。氏
。山。は。古。初。あり。又。初。初。と。い。ひ。し。初。初。初。と。い。ひ。谷。人。を。
。大。市。を。領。あり。し。初。初。初。と。い。ひ。し。八。九。十。の。前。と。い。ひ。し。
。初。初。初。と。い。ひ。し。初。初。初。と。い。ひ。し。初。初。初。と。い。ひ。し。初。初。初。と。い。ひ。し。

氏はくつふ凡海を以て長今印くを道の記す人
書人古記書も又くまてみくをある入りて厚子
今のつふとあらとお遠す事有り眼後録といふ
道と云へてより又くつふとの事す申す

○ 一宮神号左右分類 一巻 神馬獻進次第 一巻

天地擁護三十三里秘訣 一巻 日待口義 一巻

加茂鎮座秘要 一巻 貫道懐中鈔 一巻

生雲小縁紀 一巻

此書の神書を糸師より金を以て写すむて書
大く在本りあり此の書かといふは神書
中又新しき紙にさすはりの多し神書
世より争り傳はれ核の事と伝へ出古書之秘
ありとて御の書より傳傳書ありとて出外に
るありて神書官のハエ下の林ありハ
写すとせり神書入り多しぬ人ハ毎
今と浪と拾得し人々中伊勢の古記或ハ官
の

記録多人も有りありと實を考へて字す

祿書の本儀を又記す口傳あり

近信を奉り東都流の所録あり 宝永三年丙戌

任む君の意とらち池邊を老とせとみすやれ

ナラありとの水事ありしう傳されし所記すに

明て日月の老地す人とりハたあめをばし

かろくは祿代をぬけくろくをなすもあきの所と
あかき

流を水流して

なぐりくはなつり給てみあしはるとは流す

○ 美代もよのほりくはあり流の玉かりれは流す人の在り

或曰此西丸世子の沙汰とありそ言及及い

は言及及の邊いありとそ言及及も言及及に言及

書身傳のて實に仕とすれ老の記とす録位と

負り分外の密とのとすり老のありとめとすり

これ分ふ所ふといしめありとすり沙汰とすり

○ 隠其名曰く其流は異あり者あり天隱地隱人隱を

之月と己々有と存稱にとも名隠あり充隠あり通隠
仕隠朝隠市隠の如い猶多クは以呼龍舎蛭網蟲
の出々を不得してはけし小死するゆえに昔々も
之如量仕官人の網羅あり 宣久しく可一淹トミヤとて
冠と抛て朝と拜せし人と可俗蜘蛛隠と呼し
ぬき文もとりし人ありあま浮きたホク 羈ホクされ
我社の身とくくしむつたといあまし事ふの
まは違ともし 春宵一縣の夢なり他とたれ一カ貫の

錢と身にまといあり 仙とゆへ國の長とあり侍り
凡小人祿位と貪り慕欲を制せず却て躁急心熱千
方万計して是をゆるえ事と患いしゆふ依りて
權要に一區カクとゆつて詭譎キウキョウ諂諛テニエの云為巧小のゆを
偶に僥倖あり一資半級を獲しハ又惘惶セウキョウとて
是と云ふ人す成恐愁い且其職を改る祿を授け
謀との慮りて強規取のありい胸り寒たり
埋火の夢ウツクつと驚小噫アハ 百年の身快クワとて行時

安んじたるなり。女實に了るあり。海も又食者
録に隨て食らゆ之。ぬま不及して人のありしを乞
取。一飯半。夢を切て。枕飽。塵を。又他の門は立て
海に。活食。我。作。考者。凍。解。進。赤。然。り
一身。形。む。方。の。け。し。い。を。陰。及。ふ。向。と。作。き。て。死。り。り
彼。の。智。に。あ。る。を。苟。も。死。す。は。一。物。又。母。を。止。は。い。書。子
と。保。に。衣。食。の。備。人。あり。屋。舎。の。楹。あり。奴婢。の。我。等。に
り。り。あり。吾。四。の。用。お。す。是。也。是。れ。あり。是。也。是。也。

前の人を以て皆君恩にあらず。事あり。と。志。人の
富貴と。又。嘆。羨。涎。と。垂。見。分。外。の。願。す。貪。婪。の
念。止。め。り。く。離。れ。て。け。し。け。蜀。と。望。む。行。蹟。の。つ。と。を。ま。り
年。永。く。し。く。め。れ。と。人。に。而。意。なき。者。の。彼。を。食。ら。ま
り。て。盗。人。の。黨。に。近。く。と。作。り。蓋。し。庸。人。富
實。と。し。て。驕。傲。向。成。す。る。所。あり。勢。威。を。假
て。銅。山。の。和。と。盗。あり。刺。へ。國。政。に。ま。り。て
紀。綱。を。礼。て。名。を。先。し。民。を。苦。し。め。作。り。中。和。漢。を

千人とやをせしむる一世安く子孫承くはらふ
せん小人一旦世をゆき富貴を捨てし者必身も
子孫ともたあはれくたいて辱を子弟も残を
せず又古今一教あり道あり時たも久しく位は
居れは賢者のせられずくまてなき世の世も富貴
責ハ死より重未の歎いありをすす命をたもを
殺して教ふ三徑の法凡をばりし教もく人
間とつをきて茅屋の月に嘯きついで歎詠はて

天年を過す人こそ真の隠者と云ふは世の隠者
として人を及れに頂ハ浮屠に似て凡そあり権
門皆敢に立入るとくけにたつて貪まはあり
たぬいと又ありしつに年ありて又たつて
ありきあり名高族として老て人は更かえは
況やあつぬ才の良駿をゆつてさうありは地有り
おしてと業にあつ海く是ゆき己が命のあつ
る所自慢あるは名めすすましくしおおあり

多んとすりぬけりてあはれしよしあはれしよし

○大樹六十此御堂の時御杖と多てまゝと

女形を係むすぶ

そよよしゆらぐ枝のわけてまじりてはれりて代のゆめ

法不寺二位系和の影よりせまひりてをりて

春係

よふ白くちまの神のまの庭の梅のしらやまらぬ

正二位系系燕定郷

咲にわが死もあまのまをひてさゆく若のまらきりん

○庚四月二日陪從出福嶋驛一里計辱兼

君命みこと看み寢ね覺あ之境の曾ま之を耳み聽き不た若か目め視み今いま也なり倍た

千耳ちみみ聽き鳴な呼よ盤ばん石いし之の大おほ夾くわ西せい岸あし如ごと浮う蒙もう衝しやう激げき湍たん

碧あざ流なが索さく廻まわ其その間ま真ま是なり洞ほら仙せん神かみ龍りゆう之の履つみ也なり千ち相あ傳た

浦うら嶋しま子こ垂た釣つ此この地ち史し浦うら嶋しま子こ在あ丹に後ご水みづ上の上垂た釣つ

遂ついに行ゆ仙せん境の三さん百ひゃく年ねん余を而して返かへ載の在あ日に本ほん記き不た審しん雖も

然しか自より古より靈たま地ち皆みな以もつ仙せん鳴な茲こゝ不た必ず以もつ附つ尊そん論ろん之の可なり

也なり臣みこ賦つ野の律りつ一いつ章しやう述し景けい家か之の萬よろ乙を謹こゝろ今いま備へ

君上旅館之岑寂云爾

東道景光第一鮮地稱寢覺寺臨川

石如虎豹靠重嶂水似龍蛇躍深淵

海外三山何可羨湖中十境豈堪憐

傍人別指釣磯外昔日垂絲浦鳶山

并河仲賴百拜

。煬帝迷樓記

煬帝晚年在沉迷女色他日顧詔近侍曰人生

享天下之富亦欲極當年之樂自快其意今天
下安當外內無事是者得以遂其樂也今宮殿
雖莊麗顯敞若無曲房小室幽軒短檻若得此
則吾期老于其中也近侍高昌奏曰臣有友項
昇濶人也自言能構宮室翌日詔而問之昇曰
臣乞先進圖木後數日進圖帝覽大悅即日詔
有司供具材木凡役夫數萬經歲而成樓閣高
下軒窓掩映幽房曲室玉欄朱楹互相連屬回

環回合曲屋自通十門萬牖上下金碧金虬伏
於棟下玉獸蹲千戶傍壁砌生光瑣窓射日工
巧之極自舌無有也費用金玉帑庫為之一慮
人誤入者魚鱗不能出帝棄之大喜顧左右
曰使真仙遊其中亦當自迷也可目之曰迷樓
詔以五品官賜昇仍給內庫帛千疋賞之詔選
後宮良家女數千以居樓中每一幸有經月而
不出是月大夫何稠進御童女車車之制度絕

小抵容一人有機處于其中以機礙女之手足
女纖毫不能動帝以處女試之極喜召何稠謂
之曰卿之巧思一何神妙如此以千金賜之旌
其巧也何稠少為人言車之機巧有識者曰此
非盛滿之器也稠又進轉輦車車周挽之可以
昇樓閣如行平地車中御女則自搖動帝至喜
悅帝謂稠曰此車何名也稠曰臣任意造成未有
名也願賜任名帝曰卿任其巧意以成車朕得

之任其意以自樂可名任意車也何稠再拜而
去帝令畫工縛士女會合之圖數十幅懸于閣
中其年上官收自江外得簪曰鑄烏銅屏數十
面其高五尺而闊三尺磨以成鑑為屏可環於
寢所詣闕投進帝以屏內迷樓而御女於其中
纖毫皆入於鑑中帝大喜曰繪畫得其象耳此
得人之真容勝簿圖萬倍矣又以千金賜上官
帝日夕沉荒於迷樓鑿竭其力而多倦怠顧謂

近侍曰朕憶初登極日多辛苦無暇得婦人枕
而藉之方能合月德似夢則又覺今睡則冥冥
不知返近女色則億何也他日姤王義上奏
曰臣田野瘠民作事皆不勝人生於遠曠絕遠
之域幸因入貢得備後庭掃除之役階下持加
愛過臣常自宮以待陛下自茲少入卧內周旋
宮室方今親信無如臣者也而臣由是竊覽書
殿中簡編及覆玩味微有可得臣聞精氣為人

之聰明陛下當龍潛日先帝勤儉陛下鮮親聲
色也近善人陛下精實於內神清於外故日夕
無寢陛下自教年色色無教盈滿後宮日夕遊
宴自非歲節大辰何常臨御前殿其餘多不愛
朝會未移刻則至躬起入後宮夫以有限之休
而投無盡之慾臣固知其竭也臣聞古者野叟
獨歌舞於盤石之上人詢之曰子何獨樂之多
也叟曰吾有三樂子知之乎何也人生難遇大

平世吾今不見兵革此一樂也人生難得支休
完滿吾身不殘疾此二樂也人生難得壽吾今
年八十矣此三樂也問者歎賞而去陛下享天
下之當貴聖躬軒逸龍顏鳳姿而不自愛重其
思慮固出於野叟之外臣最爾微軀難圖報効
罔知忌諱上逆天顏因俯伏泣涕帝乃命引起
翌日召義詔之曰朕昨夜思汝言極有深理汝
真愛我者也乃命義後宮擇一靜室而帝居其

中女皆不得入居二日帝念然而出曰能悒
居此卒若此雖壽千萬歲亦安用也乃復入宮
宮女無數不得進御者亦極衆後宮僕夫人有
羨色一日自經於棟下臂懸錦囊中有文左右
取以進帝乃詩也自感三首云庭絕玉聲迹芳
草漸成窠隱隱聞鶯語君恩何處多欲泣不成
淚悲來詭強歌庭花方爛熳無計奈春陰
正無際獨步意何如不及閑花草翻飛兩鬢多

看梅二首之砌雪無消日捲簾時自擲庭梅對
我有憐意先雪枝頭一點春香清寥艷好誰
惜芝天真王梅謝後陽和至散與郡芳自在春
粧成云粧成多自惜夢好却成悲不及楊花意
春來到處飛遣意云秘洞爲仙女雕窓鎖玉人
毛君真可戮不肯寫昭君自傷云初入萊州日
深報未央長門七八載無復見君王春寒入骨
清獨卧愁空房孤履步庭下幽懷空感傷平日

新愛惜自待耶非常也羨成拋棄命薄何可量
君恩實疎遠毒意從傍皇家豈無骨肉偏親老
此堂此方無羽翼何計少高墻性年誠可重棄
割良可傷懸帛朱梁上肝腸如佛湯引頸又自
情有若絲牽腸毅然就死地後是然冥卿帝見
其詩及覆傷感帝往視其尸曰此已死顏色猶
美如桃花乃急召中使計廷輔曰朕向遣汝擇
後宮女入迷樓汝何故獨棄此人也乃令廷輔

就獄賜自盡厚禮葬侯夫人帝且誦詩酷好其
文乃令樂府歌之帝又於後宮親擇女百入
迷樓大業八年方士進大丹帝服之蕩思愈不
可制日夕御女數十人入凌帝煩躁日引飲幾
百杯而渴不止医丞莫君錫上奏曰帝心脉煩
盛真元太虛多飲即大疾生因進劑治之仍
乞置水盤於前俾帝日夕朝望之云治煩燥之
一術也自茲諸院美人各市冰為盤以望行幸

京師冰為之瑯貴藏水之家皆獲子金大業九年帝將再幸江都有迷樓宮人板声夜哥云何南楊柳謝河北李花棠楊花飞去落何如李花结果自然成常聞其哥披衣起聽召宴女問之云孰使汝哥也汝自為之邪宮女曰臣有弟在民間因得此哥曰道逢兒童多唱此哥帝默然久之曰天啓之也天啓之也帝因索酒自哥云宮木陰濃燕子飛興衰自古漫成悲他日迷樓

更好景宮中吐艷戀紅輝歌竟不勝其悲近侍奏無故而悲又哥臣皆不曉帝曰休問他日自知也後幸江郡唐帝提兵號令入京見迷樓太宗由是皆民膏血所為乃命焚之經月火不滅前諶前詩皆見矣方知世代興亡非偶然也

賀茂御蔭祭御神幸行列

勅使参向之行列

元禄七甲戌歲四月十八日

神人十五人布衣

黄衣

神主從三位加茂職久

同

川十五人布衣

素襖 沓持

同 笠持

正祝正四位下加茂重豊 布衣二人沓持

正祢宣正四位下加茂就人 素襖二人 笠持

權祝正四位下加茂重栄

右供同夏

權祢宣正五位下加茂清豊

行園祝正五位下加茂賢久

供同

行園祢宣從四位下加茂連久

貴布祢祝從五位孝平

供同

同 祝從五位郡久

新宮祝正四位下加茂兼益

供同

同祢宣正四位下加茂仇道

奈良祝從四位上加茂保庸

供同

日祿直正五位下加茂令頭

澤田祝從四位下加茂保加

供同

同祿直從五位上加茂孔增

氏神祝從五位下加茂兼林

供同

同祿直從四位下加茂季求

氏章素襖沓持

供上同

氏住門 豐持 保助

供上同

定久

保至

清因

供前同

供上同

供上同

慶久

清實

清喜

保嘉

保古

好頭

布衣

供日

供日

保造

清太

保壽

布衣

供日

近頭

仙道

兼友

供日

供日

供日

益頭

季秋

知道

俊道

氏宮

兼長

供日

供日

供日

季晃

明氏

兼實

宗村

供日

右後五位四位正五位

李通

後四位下後五位之衆中

敬言

素襖

籠

白丁

走馬

日

日

日

日

日

白丁十人

黃衣

神人

日

馬十疋

白丁十人

日

日

日

日

立馬乘虎後五位下加茂清美

素襖

盃持

盃持

李昆 供上同 兼苟 氏貝 保產 李品 重達 清也

方道 佐幸 氏貴 供上同 右後五位正五位 散侍 虎中

敬言 四人 李禰 二人 敬言 日 素襖

勅使 參白 行列 白丁三人 宿督 是 八代 大長

白丁 素襖

檢非違使 騎馬

盃持 白丁 大長 素襖

檢非違使

白丁 三人 持 白丁

清士 御幣 日 御幣

史生 供 白丁 三人 清士 日 白丁 日

御馬 籠 二人 素襖 馬寮 使

素襖 鏡二人 白丁 舞人騎馬四人 白丁一人 布衣

初使 日 隨人 小舍人童雜色 四人

倍從騎馬 籠人 素襖 白丁 騎馬 同 素襖

白丁二人 布衣

加茂傳奏 轅

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

